

Contents

- 事業紹介…女性の政策参画セミナー（前編）
- 事業紹介…女性に対する暴力に関する調査研究から視えてきたもの・SOHOで自分の仕事をつくらう
- 特集…くるめフォーラム2007 市民企画特集
- 誌上講座レポート…自分らしく生きる～男と女のいい関係～
- 相談室だより…「北九州監禁殺害事件について」
- 男女平等政策室からのお知らせ…市補助団体の男女平等参画の状況
- 登録団体紹介…北京JAC久留米
- 図書情報ステーションコーナー…フォーラムで上映された映画です

<http://www.elpia.kurume.fukuoka.jp>

秋
2007
vol.25
くるめ発

女性の政策参画セミナー（前編）

政策や意思決定の場への女性の参画を応援するための人材養成講座として、毎月1回（6回シリーズ）で「女性の政策参画セミナー～ここから始まるさんかくデビュー～」を実施しています。シリーズ前編の一部をご紹介します。

男女共同参画週間記念事業 「地域発・女性の政策参画をめざして」6/25 福岡県男女共同参画センター「あすばる」館長 中嶋 玲子

女性の政策参画セミナーは、中嶋さんの『男女共同参画とは私達の日常生活の中での慣習や思い込みのおかしさに気づくことから始まると思います。私自身がこれまで歩いてきた道のりが男女共同参画そのものだと思います。』から始まりました。

4世代の大家族の中で、家族みんなが性別役割分業の意識という思い込みの中で生活してきました。女性は、労働はしてもいらない自立も認められません。本当にこのままでいいの。変えなければ変わらない。頼りにされる労働力というだけでなく、経営のパートナーにならなくてはいけない。そのためには技術を磨き知識も得なければいけないと思って勉強会に行くようになり、地域の女性たちと一緒に声をあげ活動を始めました。住みよい地域を創っていくには女性も政策決定の場に出るべきだと思います。

＜男女共同参画を進めるために＞

「生きやすい」「住みやすい」「暮らしやすい」そのような社会を作るためには様々な人たちの意見を反映させる政治を行う必要があります。その中に男女共同参画という視点が必要なのです。そのためにはまず法律の整備が必要です。そのことによって、少しずつ環境が変わり制度やシステムも改善されます。そして、その一方で意識の改革が必要です。「そんなこと言ったら腹まれるから…」「怒られるから…」等、物事は男性が決まらなければならないと思ってしまう。男女共同参画を進めるためにはエンパワーメントと慣習の見直しが必要です。また、知らなければ何も言えません。力をつけるためには学習し、環境づくりとアクションを起こしていかなければならないのです。人任せではなく政策方針決定の場へ参画することが大事なのです。

＜政策立案及び決定への共同参画＞

政策立案及び決定への共同参画は2つあります。1つ目は政治への女性の参画。女性議員を選出していくことです。まだまだ女性の政治への参画はできにくい。私が町議会議員に立候補した時は、選挙のやり方を変えようと手弁当で頑張ってもらいました。女性議員が出ることは今までの選挙のやり方を変えていくためにもとても良いことなのです。多くの女性議員は家族に反対され、それでもやろうと思って立候補したリスクが大きいから、より熱心に活動します。

「アメリカ文化の中で女の子を育てて」 7/27 詩人 伊藤 比呂美



交流会は、講師を囲み和やかな雰囲気の中で盛り上がりました。

2つ目は公職への女性の参画。身近な課題を解決していくためには、審議会等への女性の参画が必要です。現実はまだ女性委員が少なく、男女共同参画社会の実現のためには、政治への参画とともに政策方針決定への女性の参画拡大が重要なテーマです。

そのためには、女性委員として市町村の課題や総合計画又は条例や要綱、行政の仕組み等知識を習得し、資質を向上させることが重要です。そして自分が参画する意義をしっかりと自覚しエンパワーメントし、そして発揮する。会議等では「黙って帰らない」「大きな声に勝たない」という心がけも重要なのです。

アメリカに住んで仕事・育児をする中でみてきた、アメリカの子育て事情・男女関係・絵本の中のジェンダーバイアス等についてわかりやすく話していただきました。

後半は、質問に答える「ライブ 万事OK!」。ユーモアを交えた説得力のある話しに、参加者は大満足でした。

男女共同参画週間(6/23～29)記念事業にふさわしい力強いお話しに、皆さんしっかり聞き入っていました。

「暮らしから見る制度と政策」8/24 投稿誌「わいふ」前編集長 田中 喜美子

女性の投稿誌「わいふ」の編集長として平成18年6月までの30年間、女性のありとあらゆる声を拾い上げてきた中で、女性の今の現実には政治的に作られているということがみえてきました。

「男は仕事・女は家庭」という刷り込み。これは戦後、女性に割り当てられてきたライフパターンです。妻が夫の給料を管理し、子育てにのめりこみ、女性はそれに満足していました。その一方で男性は、働きづめでその延長線上の過労死、過労自殺、うつ病。こういう非人間的な働きを何十年もやってきたから日本の経済が成長してきたといえます。

しかしながら、家庭の問題は政治の問題なのです。何をどう変えていくかこれからが勝負です。そのためには、女性がおかれた状況をよく知るとともに、戦後60年間の政治が何をしてきたかをもっと知っていただきたいと思います。そして、政治をもっと身近にたぐり寄せて、生活者の視点からものを言っていかなければなりません。

女性は能力があります。やる気を出したらすごい。そして一番いいことは、男性より互いに連帯しあう。日本をよくしていくために、女性同士が手を取り合い女性センターを活用する等し知識を高めて連帯して行動すべきなのです。



「女性に対する暴力に関する調査研究から視えてきたもの」～女性に対する暴力の現状と課題～

講師/内閣府男女共同参画局推進課 暴力対策専門チーム・チームリーダー土井真知さん

●内閣府が行った3つの調査研究をもとに、そこから視えてきた現状と課題についてお話していただきました。

<表面化しにくいDV>

男女間における暴力では、「異性から無理やり性交された経験」について詳しく触られました。

- ①被害体験者の43%は19歳までに被害を受けており、加害者と面識がある場合が79.6%であること
- ②加害者は主に親、きょうだい、親戚、学校の関係者であること
- ③被害に遭った場所は学校と家の中が多いこと
- ④面識があるがゆえに相談しにくく、3人に2人は誰にも相談していないこと、したがって表面化しにくい実態があることが調査からわかりました。

DVは構造的な問題で、ジェンダーに根ざす問題であり、女性は所有物、従属物としてとらえられている実情が語られました。

<厳しい自立への道のり>

「自立支援等に関する調査」では、避難後は就職先がなく、ほとんどが非正規職員であること、住宅確保が難しいこと、保育所不足など、自立した生活には程遠い厳しい現実を突きつけられ、具体的な社会資源の開拓の必要性を痛感しました。

<加害者更生プログラム>

最後の「加害者更生プログラム」については、国が任意参加による加害者更生プログラムの実施に関与することは、本当に更生してほしい加害者の参加は得にくく、無用な権威付けになりかねないことなどから、「条件が整っていない」として、必要に応じた調査研究の実施の提言にとどまった経過が述べられました。

改めて「変わりたくない」加害者の更生の難しさを実感しました。

今回使用した調査研究報告書

- ①「男女間における暴力に関する調査」(平成17年実施)
- ②「配偶者からの暴力の被害者の自立支援等に関する調査」(平成16年実施)
- ③「配偶者からの暴力の加害者更生に関する検討委員会報告書」(平成18年6月発表)



まずは、過去に経験した自分の仕事を「棚卸し」してみよう。仕事体験を丁寧に書き出して、好きだった仕事や得意だったことを探す。それをグループメンバーに話しながら、自分で気付くこともあり、また、ほめられたり励まされたりして、確信していくこともあります。

そのようにしてつかんだ「私のスキル」をビジネスとして自分のものにしていくためには、さらに時代のキーワード(生活者、少子高齢社会、地域、ITの進化)を意識した仕事づくりが必要です。

SOHO事業者としての先輩でもある深川さんからは「組み合わせでビジネスを」「勉強会やセミナーで新たな人との繋がりをつくること」など、自分の仕事を進めていく上での具体的なアドバイスが出されました。

最後に自分のSOHOプランを発表。「難しかったけど自分の未来が見えたような気がする。」という明るい顔の人たちが印象的でした。

起業支援セミナー2007

SOHOで自分の仕事をつくろう(全4回)

講師/助言者 深川智恵美(SOHO筑後川代表)

<第1回 私のSOHO、私の起業>

(7/20 体験者から聞く)

安藤裕子さん、西由紀子さん、松本倫子さんは、それぞれに、パソコン・コンサルティング、ライティング、「テープ起こし」といった自分の技術(スキル)を使って自宅での仕事を始めたばかり。仕事につながるスキルの訓練をどのようにしてきたか、仕事のスタートにつながるきっかけはどんなことだったか、など率直に体験を話してもらいました。3人とも受注する仕事量がまだ不安定ということですが、仕事に向かう生き生きとした姿は、参加者(約40名)の気持ちを重く立たせていました。

<第2～4回 SOHOをスタートするために>

(7/27, 8/3, 8/10グループ・ワーク)

SOHOとして仕事をするために、基本技術やビジネスの仕方をどう決めたいのでしょうか。これは、起業にあたって、誰もがひそかに悩み、決断を迫られる難しい問題といえます。ここを、グループ・ワークをとおして考え、組み立てていくのが今回のセミナーの1番のポイント。自分に何ができるか、何がしたいのかを、必死で考えていくことになりました。



(このレポートは10月7日に行われた講演の一部を抜粋し、センターで要約したものです。)

自分らしく生きる

～男と女のいい関係～

講師: 残間 里江子さん(プロデューサー)

1950年仙台市生まれ。1980年に企画制作会社「キャンディッド・コミュニケーションズ」を設立。2005年シニアに向けた新しいライフスタイルを提案する会社「クリエイティブ・シニア」を設立し代表取締役社長に就任。近著「モグラ女の逆襲」「それでいいのか蕎麦打ち男」。2007年ユニバーサル技能五輪国際大会総合プロデューサー。財務省「財政制度等審議会」委員、国土交通省「地域づくり表彰審議会」等行政機関の委員も多く務める。

オトナたちの時代

私は50代以上をシニアといっていますが、英語本来の意味の「上級者」「達人」みたいなオトナたちが増えて、もう少し生きやすく、若々しくいつまでも元気に自分の人生を堪能できるような世の中にしたいという思いが基本にあります。私はプロデューサーですけど、仕事の表現方法はその時々、書籍だったり、イベントだったり、講演活動だったりするわけです。プロデューサーの仕事をサポートするため、2つの会社を作りました。そのうちのひとつが、新しいシニアのためのライフステージを創る会社です。私自身は残された人生を使って日本のオトナたちがいきいきと生きられるよう、雇用の問題、健康の問題などに取り組んでいきたいと思っています。また男女共同参画は各年代層それぞれの課題はありますが、今日は特に団塊の世代前後のシニアの男女共同参画についてお話していきたいと思います。

男女共同参画って…

男女共同参画というと、硬いイメージがあるようではなかなか若い皆さんは関心をもってくれません。そこには見えない壁みたいなものがあって何かしら参画しにくいんじゃないかなと思います。また各種審議会の女性登用率は上がっていますが、よく見ると、一人が何役もやっていると実人数はそんなに増えていないということもあります。国際的に見ても、性による格差は、日本は115カ国中79番目という状況が、昨年の世界経済フォーラムで出ていて、まだまだ日本の女性は権利を主張していないという結果です。

本来、この世に生を受けたなら、ごく普通にそれぞれの人が自分の持っている資質を活かしてそれぞれの生き方をしていけばよくて、それを国が「あしなさい、こうしなさい。」というのはおかしいわけです。でもこれからの男女共同参画は、初めからもう一度、戦路を立てて冷静に、もっとこなれた感じでしかも楽しく、というようにやわらかいところからやっていかないと、若い人たちが関心を持ってくれないし先に進まないと思います。

モグラ女と蕎麦打ち男

団塊の世代の女性は就職先も少なかったし、就職したとしても25歳くらいで結婚し退職するというのが当然という時代でした。世の中に出たくても出られなかった女性がたくさんいます。それは、地中に埋もれていたモグラのようなもので、団塊女性たちは出ようと思うとモグラたたきにあうなど、なかなかうまくいきませんでした。それを称して私は「モグラ女」と呼んだのですが、50代も半ば過ぎた今こそ世の中に出るべき時が来た…ということで「モグラ女の逆襲」という本を書いたわけです。その前に「それでいいのか蕎麦打ち男」を書いていますが男たちも、もちろん何もやらないよりは蕎麦打ちやったほうがいいのですが、ただ打っていても始まらないと思うのです。「蕎麦打ち人口50数万人・全国の蕎麦打ち道場300箇所」といわれ、そこで蕎麦打ちしている男たちの多くは、そこから先に行っていない。せっかく「蕎麦」まで行ったのなら、何か今までと違う人の流れをつくるとか、今までと一味違うことをしてほしいという思いが強くあったわけです。

オトナたちへ

これからの中高年の男女には、今「改めての自立」が突きつけられています。もう一度、自分一人で立つためには、まずビジョンを持つことだと思います。1年後、3年後、5年後自分はこうしたいとか、こんな自分でいたいという理想の姿をイメージして、なにかしら基準を作ることが大事です。それから物事に優先順位をつけること。私たちの年代はそろそろ時間もエネルギーも有限になってきています。優先順位をつけたら、できることから始めてみる。その時、できれば人から褒められたことのあるような、自分にとって得意なことをやる方がより良いと思います。それにも増して大事なことは、決してあきらめないこと。これからのオトナは、あきらめないどころか、一歩先を行って自分の意志を表に出すようにしたいですね。是非「私たちは自立したオトナの女、オトナの男」といえるよう、一緒にがんばっていきましょう!

キラリ!! わたしの 未来の男女たち

①男女(みんな)でつくろう いきいきと暮らせる町 【講演会・高山史子】

副市長としての経験もまじえたお話を、みな熱心に聞き入っていました。(会場:城島公民館)



②高齢福祉について考えよう! -しくみを知ってかしこく使おう! 【講演とシンポジウム】

3人のシンポジストからは、介護体験などの丁寧な報告がありました。(会場:北野公民館)

③食と命と男女共生 【腹話術と講演・山本のり子】

人形とのやりとりで面白いお話が、楽しくて、わかりやすく、時間のたつのが早く感じられました。(会場:田主丸ふよかゼネラル)



④男女共同でつくるまちづくり 【パネルディスカッション・コメンテーター:北野史子、他】

できそうでむずかしい暮らしの場での男女共同参画。そこで活躍する10人+16人の報告に拍手。(会場:西園分校区コミュニティセンター)



⑤女性が健く幸齢社会 【講演・伊豆美佐子】

若や会への活動から健康の大切さへ、さらに女性の果たす力の大きさを力説されました。(会場:三浦公民館)



⑥男性のための料理教室 【調理実習】

初めて体験する人も、和気あいあいの雰囲気で大満足でした。(会場:津福校区コミュニティセンター)



⑦あなたの人生の黄金期をめざして! 【シャンソンと寸劇】

夫婦や親子の日常会話を再現した寸劇は身にもこまれるシーンがいっぱい、シャンソンに癒やされました。

久留米女性週間記念事業・男女平等社会づくり
くるめフォーラム2007

KURUME FURUM2007

10月2日(火)~12日(金)

市民企画 特集

今年も、グループ・団体への公募を経て「えーるピア久留米」内外で、16の市民企画が実施されました。演劇、朗読、ゲームや実習など、それぞれに工夫された企画の中で男女平等について考えたり、参加型の学習会や講演会にも熱心に取り組まれるなど、グループ・団体の活動成果を参加者と共有することが出来ました。特に今年は、地域会場での企画も6企画となり、より多くの方がそれぞれの地域で男女平等を考える機会を持つことができました。



⑧ジェンダーからだと韓式氣功 【ゲームとストレッチ】

「服装にする、それとも食事(卵の殻)」などの悩み上げられたカードを走って取るゲーム。表情は真剣そのもの!



⑨おはなしと音楽にのせて -絵本の中にも自分らしさ- 【お話と音楽】

自分らしくあることの喜びが伝わってくる朗読に、会場は笑顔にこぼれ、フルートとピアノもステキでした。



⑩歌い飛ばそうジェンダー、 歌い上げよう私らしい人生【替え歌合唱】

ジェンダーから自由になんか生きていきたい!思いを言葉にして、歌ったんだよね!と歌いながら、皆で歌える歌ができました。2階での合唱が下のフロアにも響き渡ってステキでした。



⑪ハンクラディッシュの女性たちがつくる 伝統的「ノクシカク」そしてその想い 【講演とワークショップ】

伝統的「ノクシカク」の制作は、フェア・トレードで日本の私たちに繋がっていることを知りました。



⑫これって、デートDV? 【講演会・堤かなめ】

ロールプレイをまじえてのデートDVの話は、具体的に分かりやすく、若い人たちがもっと広めたいと思いました。



⑬ドイツ人の妻と日本人の夫の二人三脚物語 -一個を生きる、倍を生かす- 【トーク】

6人の子とともにお二人の夫・妻とも仲良く暮らしている英語教師エリザベスさん。「私は私」というお二人の思いが印象的でした。



⑭私たちの性と生殖の健康と権利は 守られているのか? 【シンポジウム】

女性に関わる深い疾患(卵がん、子宮がんなど)が増えているという報告は、専門家の話と共に考えさせられました。



⑮演劇『蔭かんと生えん』 -なぜ今、男女共同参画か- 【演劇と交流会】

田川の女性たちの演劇は単で暖か、面白いながら泣いてしまって、男女平等の大切さをかみ締めました。



⑯若菜みどりさんの死を悼む会(企画変更) 【交流会】

予定講師の都合により内容変更。若菜みどりさんの活動を支えた資料を持ち寄って「悼む会」を開催しました。

企画・実施した団体・グループ

- ①城島女性ネットワーク
- ②北野女性ネットワーク
(共催:高齢社会をよくする会久留米)
- ③田主丸女性ネットワーク
- ④西園分校区まちづくり委員会
- ⑤三浦女性ネットワーク
- ⑥津福校区コミュニティセンター
- ⑦久留米ウィメンズ・ネット
あすまいる
- ⑧ローズマリー
- ⑨東京JAC久留米&女研研
- ⑩久留米男女共同参画推進ネットワーク
- ⑪Support of the Child
- ⑫トリブプロジェクトヘルス/ライツと環境を考える会
- ⑬NPO久留米地球市民ボランティアの会(KOVC)
- ⑭プラスワン・ライブ
- ⑮伝・ばーふるリボン

「男女平等社会実現の一翼を担い」

1995年の第4回世界女性会議(北京会議)に参加した女性達を中心となって、北京JACが設立され、その地域組織の一つとして、私たちの北京JAC久留米もスタートしました。現在会員は16名で毎月2回例会を行い、今年で12年になります。

主な活動は、会員研修のほか、女性政策に関するロビー活動や調査・研究などです。第5回世界女性会議(ニューヨーク)への参加、また韓国全州市やニュージーランドの女性政策の視察など、海外研修も独自に取り組んできました。そこで受けた刺激や経験をもとに、久留米市の男女平等政策が進むよう働きかけてきました。

中でもセンターの調査研究事業として採用されて取り組んだ「久留米市におけるDV実態調査」(H13年度)の成果は、久留米市のDV被害者対策に活かされたこと自負しています。他にも市の各種計画策定、時には男女平等の視点でパブリックコメント提出するなどの活動を行って来ました。報告や提言の作成は、時間や労力がかかり大変ですが、それが市の施策の中を生かされていくことは喜びです。また、「ぐるめフォーラム」には毎年参加し、今年も市民企画と展示を行いました。



これからも、メンバーと共に勉強を続け、市の女性政策について提言を行っていきます。新規の加入はいつでも大歓迎です。一緒に女性政策について学びませんか。

図書情報ステーション

過去のフォーラムで上映された映画です。もう一度、家族、友だち、あるいは1人で、じっくりみませんか。

DVDの貸し出しOK!



「ミリオンダラー・ベイビー」2004年 アメリカ (139分)

社会の底辺に生きながらも、そこから遠い上がろうと人生の夢をボクシングに託した女性と、実の娘に縁を絶たれた初老のトレーナー。二人は葛藤や衝突を重ねながらも互いに理解を深めて行く…。そしてついに迎えたチャンピオン戦と衝撃の結末。2005年アカデミー賞4部門を独占した作品。



「めぐりあう時間たち」2003年 アメリカ (115分)

1923年のロンドン郊外。1951年ロサンゼルス。2001年ニューヨーク。人生はいつもミステリーに満ちている。人は誰のために人生を送るのか?自分のため?愛する人のため?家族のため?3つの時代を生きる3人の女のある1日が私たちに問いかける。マイケル・カニンガムの原作も貸し出しできます。



「女はみんな生きている」2001年 フランス (120分)

ある夜、夫とともにパーティーへ車を走らせていると、怪しげな男たちに追われた女が助けを求めて必死にドアを叩く!! 平凡な主婦エレーヌと謎の娼婦ノエミが繰り広げる、笑いあり涙ありの痛快人生口マン!!

●編集・発行●

久留米市男女平等推進センター

〒830-0037 久留米市湯野野町1830-6
スーパピア久留米内
TEL.0942-30-7800
FAX.0942-30-7811
URL:http://www.alpiakurume.fukuoka.jp
E-mail:danjo-c@city.kurume.fukuoka.jp



■徒歩/西鉄久留米駅から約10分(約700m)
■バス/西鉄久留米駅から約5分
JR久留米駅から約20分
「祝儀前」下車、徒歩3分
■駐車場(有料)はございますが、おいでの間はなるべく公共交通機関をご利用ください。

相談室だより

「マスコミ」に登場した、女性の暴力に関する記事「シリーズ②」

類を見ない残酷な事件

北九州監禁殺害事件については、犯罪史上類を見ない残酷な事件として「記憶」にある方も多いと思います。90年代の福岡新聞において、福岡地方法院判決については無期懲役に処せられたという減刑判決が言い渡され、DVを認定した画期的な判決として話題を呼びました。

親密な関係で起こる暴力

この事件は、集団であっても親密な関係を利用して被害に支配されること、親密な関係で起こる暴力は、他人からの暴力と違って外からは見えにくいこと、被害者自身も自分の状況に気づきにくいこと、被害者となるとき改めて私たちに教えてくれました。逆に、被害当事者を孤立させないこと、適切な情報が届くことが支援において重要な鍵を握ること、私たちが気づくべきこと。

女性への暴力の根絶に向けて

ところで、結方被告が松永被告と知り合った25年前は、日本の社会にDVという現象はなかなかに稀な状況でありました。しかし、急激な社会状況ではありましたが、では今の時代であれば状況は違ったかと言えば、違う展開になった可能性はあるものの、社会がDV問題を無関心であれば今でも同じことは起こり得たでしょう。

このように急激な事件の再発防止には、社会全体でDV問題への理解を深め、根絶に向けて断続的な取り組みが不可欠です。11月12日、25日は女性に対する暴力の根絶に向けて国際キャンペーン期間です。この機会に暴力の問題を話し合おうとする機会を設ける人がひとりでも増えることを願うばかりです。

男女平等政策家からのお知らせ

女性の登用率調査第2弾は

「市補助団体の男女共同参画の状況」です。

地域における男女共同参画の現状を把握し今後の施策に反映させるため、初めて市が補助金を交付している団体への男女共同参画状況調査(平成18年10月実施、調査票配布422団体、回収率63%)を行いました。

・「役職に占める女性の割合は、会長副会長などの役職には男性が多く、女性の割合が高いのは会計、書記となっています。特に女性の割合が少ない理由として、「女性の人材が少ないから」、「女性自身が責任のある地位に就きたがらないから」、「家事・育児などで時間的制約があるから」が上位3つでした。

・また、これから団体において男女共同参画をより進めるには①女性の活動の場や機会の拡大②性別で仕事内容を区別しない(湯茶の給仕や配席)③男女が共に参加できるような活動時間の工夫等の取り組みが必要との結果も得られました。

私たちの社会は、男女で構成されています。男女があらゆる分野に、共に参画できるまちづくりを進めるには、身近な地域をはじめとして様々な分野に男性と女性が対等な立場で参画している環境づくりをすすめていかななくてはなりません。市民一人ひとりが男女を問わず、社会の固定的な性別役割分担やその意識を見直していくような取り組みが期待されます。

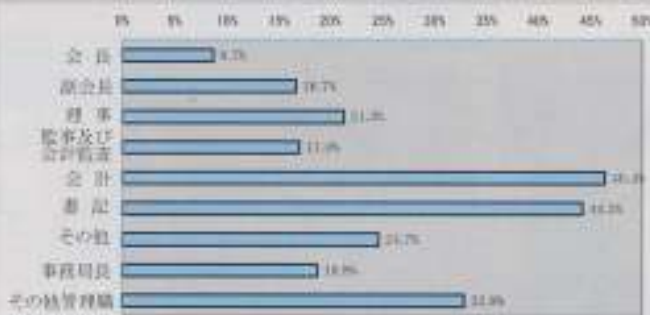


図1 役職に占める女性の割合